氏名	櫻井　駿介
ヨミガナ	サクライ　シュンスケ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博音第339号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 現代日本における小規模民間型アートスペース《micro art space》の流転：2000年以降設立の事例から、主宰者たちの眼差しを中心に

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	熊倉　淳子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	毛利　嘉孝
（副査）	東京藝術大学	特任教授	（音楽研究科）	長島　確
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	田村　文生
（副査）	立教大学	准教授	（社会学部）	小泉　元宏

（論文内容の要旨）

本論は、現代日本において立ち上がる小規模かつ民間のアートスペースを《マイクロ・アートスペース／micro art space》と称し、その多様化の背景を読み解きながら、主宰者たちが対峙する現場での諸相とその要因を明らかにし、そこから今日的な文化芸術の役割を提起することを目的としている。

研究対象について、各地に点在する事例の類型化や用語定義についての先行研究、資料を概観すると、文化芸術の枠組みが拡がる状況下、具体的な総数は曖昧なままに、多くの場合は「多様化」という動向に収束されるか、「オルタナティヴ」という構造に結び付けられていた。しかし、そうした既成の枠組みで諸相を括るだけでは、一体誰が、何を目指してアートスペースをひらき、どう続けてきたのかという「個」の様相が抜け落ちてしまう。社会のリアリティに最も近接し対峙し続けるのは、実践の現場に立つ人びとにほかならないという視点から、評価や理論化を第一義にせず、同時代における「主宰者の眼差し」を中心に据えて分析、考察した。

本論の構成は以下の通りである。

序章では、本論の研究背景として小規模かつ民間によるアートスペースの変遷を概観し、先行研究において抜け落ちた観点として「個」への視点を提起した。

第一章では、日本全国の700件の事例を対象に量的調査を実施した結果を示し、全体的な傾向を見出すとともに、共時的な多様化の背景にある通時的な変化を指摘し、データの比較では特に見えてこない要素として、必ずしも利潤を追求しない「資金源」の捉えかたや、半ば強制的に関係を持たざるを得ない「地域」への姿勢、個人的な感情が重要な位置を占める「属人性」を取り上げた。

続いて第二章では、質的調査として《mas》の主宰者に非構造化インタビューを実施し、現場での葛藤や流転のさまから、それぞれの実践の在りようを強調した。彼らは助成金制度の制約に躊躇うことや、町との付き合いかたに違和感を覚えながら、自らの位置を定めようとしていた。そこでは、必ずしも細部まで運営方針や数値目標を想定しているわけではないが、それぞれが経験した社会に対する不足感を自分だけの問題にしない強い意志が存在している。

第三章では、そうした諸相をさらに深く見出すべく、設立から間もない期間に対面する「齟齬」に着目しながら、主宰者とその関係者へインタビュー調査を追加で実施した。現場にあったのは、主宰者の内側に潜む自負を手放さないための「わがまま」と、場所に固執しない「思いの丈」としての《mas》である。彼らは、あらかじめ何が起こるのかを想定しきらずに動き出し、余白を残しながら身軽にあろうとする。それは、新規性や継続性、既存の文化政策における評価から離れた地点に発生しているようだが、周縁にいる関係者たちさえも自らの視座を獲得し、伴走しながら、逡巡し、楽しんでいるようであった。

第四章では、本論の到達点として、明確な目的や運用方針に捕われることなく流転する主宰者たち、そこに健やかな距離感を模索しながら共在する行政自治体があること、この複層的かつ流動的な結び付きを包括した社会が、結果的に文化芸術の可能性を担保するという視点を提起した。この構造の前提となるのは、社会やアートシーン、自治体職員や地域住民といった概念や枠組みとの相互影響ではなく、現場で対面するのはあくまで１人の「私」同士であるということだ。公の場へ向けて「思いの丈」を表明し、他者と共有することを願う《mas》の諸相には、主体的に動き続ける人間味を帯びた「私」としての視点を見出すことができた。それらは既成の公的なるものと直面するがゆえに流転し、そこで如何にして「私」たちの思いが通用するのか、主宰者たちのみならず、関係者たちも逡巡してしまう。ともすれば、彼らと遇する地域や行政自治体も、主宰者たちを継続的かつ明瞭な発展を要請する「人材」として価値づけるだけではなく、流転を繰り返す「人物」として向かい合い、投資する勇気が必要となるのだ。以上のことから、主宰者たちにとっての文化芸術とは、それぞれの不足感に対峙し、他者との共鳴を願う地道で日常的な行為であると提起し、今日的な文化芸術の価値とは、「人材」から「人物」へ、「個」から「私」へ、客体的ではなく主体的な視点を想起することによって輪郭を確かにすると論じた。

終章では、本論の要点をまとめ、《mas》への視点から立ち現れる現代日本の文化芸術への展望を述べ総括とした。

（総合審査結果の要旨）

「現代日本における小規模民間アートスペース《micro art space》の流転：2000年以降設立の事例から、主宰者たちの眼差しを中心に」と題された本博士論文は、全国で数多く生成と消滅を繰り返す個人ベースの文化空間の実態を、量的調査と質的調査の両面から詳らかにするものである。第一章では修士論文からの積み重ねである量的調査の結果を示し、700件に及ぶ事例を分類、多くの先行研究が「多様な状況を呈している」とのみ述べてきた現状に、一定の傾向を見出すことに成功している。しかし、量的調査が示す共時的な傾向からは、micro art space（以下mas）の価値や文化的役割を捉えることはできないとし、第二章・第三章では４つの事例を取り上げてインタビュー調査と参与観察を行い、masを一人で立ち上げた主宰者たちのライフヒストリーを聞き取り、生成と流転を繰り返すこうした活動の通時的な側面を明らかにする。第四章ではmasが地域にもたらす「小さな《公》」を、現行の助成制度が求める「大きな《公》」と比較し、文化政策批判を展開している。

審査会では、特に第二章・第三章の質的調査の成果が高く評価された。主に、１）これまで欧米の概念を用いて「オルタナティブスペース」と括られつつも、欧米の定義とは明らかに異なる様相を呈する日本固有の実態が明らかになった点。２）地方都市や郊外など、文化環境が脆弱な地域で芸術を支える人々の実情と、現行の助成制度や政策との祖語を指摘し、優れた政策批判として説得力を持つ点。３）丁寧なヒアリングが抽出した個々人の言説から、芸術が社会にいかなる場を生成し、人々の人生にいかなる価値をもたらすのかという根源的な問いに、非常に有益な議論を展開できている点、などが本論文の成果として認められた。第四章における「公」に関する論述では、公共性の定義がやや不明瞭との指摘がなされたが、博士論文全体の価値を損なうものではないとして、学位授与にふさわしい成果であるとの結論に至った。